

# 母親の愛着形成に影響を及ぼす父親の言動の分析

周産母子センター

○小原 作実・小笠原美和・谷脇 文子

## I. はじめに

超・極低出生体重児は特に出生後早期に医療的処置を必要とし、愛着形成上重要な期間に母子分離を余儀なくされる。

当院周産母子センターでは、両親の愛着形成促進のためのケアを行っている。児の保育器収容期間中における、両親の24時間面会フリーオープンスタイルや早期保育参加などであり、母親の愛着形成の促進に良好な結果を得ている。

今回、母親の愛着形成には、父親の存在が重要であると実感した症例を経験した。特に、父親の言動が、母親の愛着に影響を及ぼしていると考えられた2症例を報告する。

## II. 調査方法

対象は平成10年2月1日から4月30日の間に当院で、超・極低出生体重児を出生した2組の両親である。(表1)

表1 症例の背景

	年齢	家族構成	職業	分娩時の状況	児の状況
症例A	父22歳 母22歳	夫婦のみ	父建設業 母主婦	子宮頸管無力症で母体搬送され、4日後に分娩 妊娠28週 初産婦	1065g 女児 Ap:8点 出生直後より保育器収容し 呼吸管理実施
症例B	父24歳 母21歳	夫婦のみ	父漁師 母主婦	子宮頸管無力症で母体搬送され、50日後に分娩 妊娠25週 初産婦	743g 女児 Ap:8点 出生直後より保育器収容し 呼吸管理実施

父親の言動分析は、両親と児の初回及び、日令60日以内の面会時における、親のコメント、親の行動(接触、声掛け)について、カルテから抽出した。情報不足分は両親の面会時の回想インタビューより収集した。

## III. 結果

本症例は、20代前半の若い世代の核家族であり、母親は主婦である。また、初産婦であり、他院からの母体搬送の後、当院で早産に至っている。

症例Aの両親の言動(表2)について、出生当日の初回面会時、父親は医師の説明にうなずき、母親に、小さくてかわいそうだったと話している。日令2日目の母親の初回

面会で、母親は児が小さいことを発言し、タッチングをしている。また、初回面会以降も小さいことや体重など児の大きさに関する発言が続いている。

日令4日目では、父親が看護婦にどちらに似ているかと質問がある。日令37日目を越える頃より、父親は「児が大丈夫だろうか」「児が健康だろうか」といった質問と、母親のミルク注入に対する批判や指示などの言動が見られ始めている。その後、日令46日目で自分の小さい頃にそっくり

りと、児に話し掛けている。父親が自分自身に似ているとの発言に対して、母親は疑問を投げ掛けながらも、自分自身にも似ていると答えている。母親が児と自分自身が似ていると発言して以降、母親は、手を舐めるなど児の行動に対しての質問や発言が多くなっている。尚、父親の面会回数は60日間において51回あった。

症例Bの両親の言動(表3)について、父親は初回面会時、症例Aの父親と同様に医師の説明を無言で聞き、タッチングを拒否している。しかし、日令4日目ではタッチングを拒否しても、「ほとんど僕に似ているみたい」と発言している。

父親は初回面会以降、「児が大丈夫だろうか」と

表2 症例Aの両親の言動

時期	父親の言動	母親の言動
日令0	初回面会。医師の説明にうなずく。手に傷がありタッチングできません。母親の病室で「小さくてかわいそうだった」と話す。	「会いたい」
日令2	「飯食べなくて大丈夫ですか? こんなに動いて大丈夫ですか?」	母親初回面会「小さい…」とタッチング「小さいけど、すごく元気で付けている管をのけるぐらいに暴れていて安心した」
日令4	「どっちに似てると思います?」	
日令37	「体は健康ですか?」 「(授乳時間になったから)早くミルク入れてやれ」	
日令40	「お前がミルクを飛ばすからだよ」	ミルク注入の臍、誤って児にミルクを散らしてしまう。注入後、児を見て「今日は不機嫌みたい」
日令45	母親の態度を見て「そんなに急ぐな。〇〇そっとして置いてやれ」	看護婦に祖父母との窓越し面会を相談、できないことを説明され、納得している様子。
日令46	「この子、一重瞼だね」  「僕の小さい頃にそっくりだね、〇〇」と児に話掛ける。	「違うよね」  「えー」と父親を見る 「私も臍だったから似てるんだ」
日令47		「こんなに動き回るものですか?」
日令48		「自分の手舐めて、お腹拭いたの?」

表3 症例Bの両親の言動

時期	父親の言動	母親の言動
日令0	初回面会。医師の説明を聞き、無言。タッチングは拒否。	「(児に) 会いたいです」とにっこりする。
日令2		初回面会「小さいねえ」とつぶやく。
日令4	タッチング勧めるが「まだいいです。ほとんど僕に似ているみたい」	少し触つけど小さくて怖」と名前呼ぶのがタッチングする
日令10	「大丈夫やろうか」	
日令18	「少し大きくなった気がする」	
日令23	「調子はどうですか?」	体重はどのくらいですか?」
日令32	「俺はいい」	あがた、触っておいて」
日令40	「〇〇に変わったことない? よくなっていますか?」 「猿みたい。おれみたい」	
日令43	仕事のため来院せず。「今日も変わったことなですか」と母親より伝言	「鼻が特にお父さんに似てる」
日令54	仕事のため来院せず。	「口を手を持っていくってすごい」

いった健康状態に関する質問が多く見られている。日令 32 日目では、母親が児へのタッチングを勧めているが断り、それ以降、看護婦がタッチングを勧めても断っている。

日令 40 日目で、父親は児の目が自分に似ているという具体的発言をし、この後母親はさらに、父親に鼻が似ていると、児と父親との類似点を追加する発言をしている。そして、母親は症例Aと同様、児が誰かに似ているかを発言した後、児の行動への質問が見られている。

尚、父親の面会回数は 60 日間において 9 回であった。

#### IV. 考察

以上の 2 症例の結果から、注目すべき共通点及び相違点は次の通りである。

共通点の第 1 点は、父親は初回面会以降、『児が大丈夫だろうか』といった、児の健康状態に関心があることである。竹内らも「父親はできるだけ客観的に事態を把握し、母親へ児の情報を伝達しようとする意識もある」と報告している<sup>1)</sup>。また、2 症例とも母体搬送された症例であり、父親は医師より児の生命予後の保障がないことを説明されているため、その予後に不安があると考えられた。

第 2 点は、母親が早期から児の体重に関心が集中しているが、日令 40 日目を越えると『児が大丈夫だろうか』といった、児の健康状態に関心を示しはじめていることである。児の体重増減への関心は、分娩後、父親からの第一報が、小さいことに関連していること、また、児の健康状態に関心が向けられている事は、日数を経て、児の予後及び母親が低出生体重児を出産したという、危機的状況を回避していることだと考える。

第 3 点は、父親が自分に似ているという発言である。2 症例とも児が呼吸管理中での発言で、父親が児と自分自身の共通点、類似点を探索、発見しようとする行動が認められた。母親も同様の発言をするが、それは日令 40 日目を越えてからである。これを契機に母親は、児の行動に関する質問、観察などの発言が生じている。

以上の共通する 3 点は、父親が発言した内容が後で母親にも見られており、その逆もあることである。つまり、父親の言動及び母親の言動は、互いに影響し合っていることだと考えられた。

次に相違点は次の通りである。

第 1 点は、2 症例の母親ともに児が『手を舐める』ことは発見できているが、症例Aではそれを見て、「お腹すいたの？」と児に話し掛けている。これは、児が手を舐めるという行動を母親が、児の空腹と解釈していることである。しかし、症例Bは、児の行動を「すごい」といった母親の感動でしかとらえていない。

いう行動を母親が、児の空腹と解釈していることである。しかし、症例Bは、児の行動を「すごい」といった母親の感動でしかとらえていない。

第2点は、症例Aの父親は「一重瞼だね」と発言し、母親が「違うよね」と否定すると、「俺の小さい頃にそっくりだね、〇〇」と、児に話し掛けていることである。これは、父子間、母子間、両親間の一方的な会話でなく、児の代弁をすることで両親と児の3者の会話が成立していると考えられる。一方、症例Bの父親は、日令60日目を越えてもまだ児に触れることも話し掛けもできていない。加えて面会回数は、症例Aが51回、症例Bが9回であった。

これらの相違点は、2症例の母親は共に、児の行動を観察することはできているが、その意味を解釈できるかどうかである。また、愛着形成に母子相互作用が必要な要素であれば、症例Aは3者間の会話を通して、相互作用が発展していると言えよう。

今回2症例を通して、父親と母親の言動を分析した結果、母親の愛着形成の要因として、父親と児の接触、面会回数が父親自身の行動評価となり得るのではないかという示唆を得た。父親の言動規制するものについての要因を探るには至らなかったが、言動をシグナルとして、愛着形成に重要なデータ収集をしていく必要がある。

## V. おわりに

今後は、児とその両親の愛着を促進させる要因として、父親の背景、両親が児と自分との類似点を探索、確認する言動、児の健康状態に関する言動、児の行動をシグナル行動として受け取っているかどうかの有無をデータベースへ追加していきたいと思う。

## 引用・参考文献

- 1) 竹内 徹：未熟児養護と母子相互作用，周産期医学，17（4），1987.
- 2) Klaus.M.H.他（竹内徹訳）：親と子のきずな，医学書院，1985.
- 3) 渡部順子他：超未熟児のファミリーケア-当院NICUでのファミリーケアを通して，NICU，6（4），21-27，1993.
- 4) B.Brazelton（小林登訳）：ブラゼルトンの親と子のきずな，医歯薬出版株式会社，1982.
- 5) 川井 尚：愛着（アタッチメント）の形成，周産期医学，26（1），69-72，1996.

〔平成10年5月16日，高知市にて開催の第27回日本女性心身医学会  
学術集会で発表〕